「行動こそ評価」に軸足

立法の府は結果で勝負　身内も〝口撃〟

盛りの夏へ　'98参院選　<3>

社民党が政権離脱を決めた先月三十日朝。携帯電話が鳴った。

「今日でお別れですね」

自民党幹事長の加藤紘一からだった。「テレビがたくさん来てるから、きれいに化粧したほうがいいよ」

根回し相手でもあった〈お友達〉からの電話を切り、社民党常任幹事会へ。詰めかけた記者に感想を求められ、こう答えた。

「私、野党やったことないから、わからへん」

辻元清美、三十八歳。比例近畿ブロック選出の衆院議員、当選一回。早大在学中、客船で世界を巡る国際交流団体「ピースボート」を設立。現在、党幹事長代理。「（自民と民主で同じ党職の）野中広務と鳩山由紀夫がライバル」。趣味、コンビニでの雑誌の立ち読み。

参院選大阪選挙区（改選数三）から、自らの呼びかけで設立した市民グループ代表の長崎由美子（42）を党公認として担ぎ出す。

＊

「『このままでええやん』と言うて離脱に反対する人の背中、けり倒したってん」

「今まで街頭活動してても格好悪かったんや」

一夜明けた三十一日、大阪府島本町での「国会報告会」で、離脱までの経過を語る。といっても、そこは辻元流。下町のおばちゃん風の大阪弁で、他党も身内も、遠慮なくこき下ろす。

ただ、閣外協力が間違いだったとは思わない。与党の強みも身をもって感じてきた。

「結果が大事」。そんな思いも隠さない。

「精一杯反対した、ここまでやったんやから実現しなくてもしかたない――そんなんではダメ」「国会は立法の府。どんな法律作ったかで勝負するとこや」

自ら担当したNPO法（特定非営利活動促進法）でも、「とるもん、とる」ため、妥協もした。自民党への根回しもいとわなかった。

それでも、党内では離脱を主張してきた。

「自民と組んだままでは、地方組織がもたない」

選挙をにらんだ党幹部としての計算ものぞかせる。

＊

「私の気持ちを代弁してくれた」「実現しなかったが、反対を叫んでくれた」「実現はいつになるかわからないが支持しよう」――。

そんな有権者の思いを、辻元は〈心情代弁型支持〉と名付け、従来の社民党支持層の主流とみる。それを「私の考える方向に行動してくれた」「少しでも実現してくれたから応援する」という〈行動評価型支持〉に軸足を移したいと考えている。

布石は打ってきた。

東京・有楽町で先月十七日開いた「党総決起集会」は、フリーマーケットあり、コンサートあり、屋台ありの市民参加型に一新した。長崎とともに大阪で毎週末行っている街頭宣伝や集会でも、スローガンの連呼は慎み、党の主張より党の行動を訴えてきた。

「いずれまた政権入りしてもいいと思っている。例えば『環境大臣だけはとる』っていう作戦もありやと思う」

票につながるのか。

それは辻元にもわからない。「実験やねん」とこともなげに言い切る。

社会党時代から三十年近く府連を守ってきた幹部は「党の歴史も知らず、有力な支持基盤もないから言えること」と冷静に見つめつつ、言葉を続けた。「今は辻元にかけるしかないんや」

政界再編のあだ花となるか、再出発への一歩となるか。最初の〈実験結果〉は一か月後に出る。

（敬称略）

社会部・二河　伊知郎

市民集会で、参加者と語らう辻元清美衆院議員＝右から２人目（７日、大阪市内で）